

文化交渉学 _____ 専攻 _____ 領域（博士前期）

試験科目：第 外国語（外国語） / 専門科目（ ）

解答例：

『オリエンタリズム〈上〉』サイード，エドワード・W. 著／今沢紀子訳（平凡社，1993年）の「序説」冒頭を参照（PDF添付）。

ポイント：

英語で記述された文化交渉に関わる文章の内容を理解の上、その趣旨が適切に伝わる日本語に移し変えられているか。

文化交渉学 専攻 _____ 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第1外国語（中国語） / 専門科目（_____）

- ①従来、中国の善会善堂は無業游民に対してほとんど救済をしなかった。それは彼らが道德上の欠陥がある者に見なされたからであった。したがって、游民問題は近代以前ないし近代初期においては基本的に官側と紳士などの地方エリートに一つの倫理道德問題として取り扱われ、主要には排斥・鎮圧の政策を採用した。
- ②民国初年の上海普益習芸所と新普育堂は、各種の游民を比較的多く収容し処理し始めた。とりわけ若く力も強い者に対しては収容し、生産加工技術を教え、一つの技能を身につけさせて、出所後に自ら生計を営むことができ、さらに放浪しないようにすることを試みた。しかし、この時は游民を貧民と同様に取り扱った。つまり游民問題を経済問題、貧民問題として処理した。
- ③この時期、游民はすでに「社会の害虫（寄生虫?）」と見なされていたが、当時の人はまた游民があふれているのは社会の現状がそうさせるのだと認識していた。游民を取り締まり、安置することは、地方の公共・安寧を保全するためでもあった。このため、一部の人は游民問題を治安問題、社会問題として取り扱い、游民問題を救済・処理する各種の提案を積極的に計画し始めた。
- ④しかし、游民に対する道德批判も終始消えることはなく、彼らは「生まれつき性格が劣悪」で、「不良分子」であり、游民・乞食は「社会のカス」「専ら詐欺を行い財を盗み、甚だしきは向こう見ずな行為に走り、落ちぶれて盗賊となり、社会の安寧秩序を破壊すること、これよりも甚だしくはない」と言われた。
- ⑤人民政府の游民改造政策においては、いきなり游民・乞食は「労働人民」の出身であることが強調され始め、彼らが游民に落ちぶれた所以は、主要には国民党反動派の罪悪統治のために正当な生産・生活条件を失った結果であった。同時に、長期に帝国主義・封建勢力・官僚資本主義の統治と搾取を受けたためであった。このため、游民を収容・改造することは、旧制度・旧社会に対する否定と整頓であるだけでなく、同時に苦難に遭った同胞を救済する壮挙であった。

文化交渉学 専攻 _____ 領域 博士前期/修士・博士後期・前後期共通)
試験科目：第 外国語 () / 専門科目 (小論文)

一) ひとつには、西欧による近代世界の「発見」を促す叫び、植民地主義的「領有」の前触れとなる符牒で、服属と差別のマイナスの意味合いを持つ。そしてもうひとつには、そうした歴史の顛末を超えてゆく、原初の、未だ整序されていない渾沌とした響き、画一的な意味に回収されない、群島論的な想像力を開く未知の可能性を内包する。

二) 沙力浪の詩では、彼が祖先であるプヌン族の足跡を追い、険しい山や立ち込めた雲のなかを歩き、その身体的経験から歴史を紡ぎあげてゆく過程と、PCを用いて種々の記録を読解・消化しつつ、キーボードで詩を打ち込み、クラウド上に保存する行為が重ねあわされ、融合している。ともに過去／現在を繋ぐふたつの異なる経験／行為が、ひとつの歴史実践として融けあい、新たな未来を創造する方向へ繋がってゆくことが示されている。それは単に、過去を正確を復元し懐かしさをもって回帰する後ろ向きの営みではなく、先住民族の末裔がその伝統を未来へ向けて創造的に組み換えてゆく、新たな生き方のヴィジョンなのだと考えられたため。

文化交渉学 専攻 _____ 領域 (博士前期/修士・博士後期・前後期共通)

試験科目: 第1外国語 (中国語) / 専門科目 (_____)

①成都では、人々は相互に衝突すれば、一般に法廷に行くのではなく、茶館に行って是非を判別し調停を行う。これを「もめ事解決の茶を飲む」あるいは「茶館で決着をつける」などと称し、茶館はもめ事を解決する一つの場所となった。哥老会のメンバーは、「もめごと解決の茶を飲む」活動において重要な役柄を演じた。哥老会のメンバーはいつも調停人になることを求められ、茶館も彼ら内部のもめごとの解決に用いられる場所であった。一般的な順序はこうである。衝突した双方は、一人の地方で声望のある仲介人を招聘して調停を行わせる。双方が理由を陳述し、仲介人が裁判を進める。間違った方が、お茶代を支払い、相手方にお詫びをする。これは、エリートが茶館を社会に介入する空間とし、これらの茶館も地域社会（コミュニティー）の中心となっていることを示している。したがって、茶館は一つの経済的中心であるばかりではなく、地域社会のつながりと同郷のアイデンティティをも促進した。「もめごと解決の茶を飲む」という活動が長期にわたって広範に地方で実施され得たのは、裁判が公衆の監視の下で行われ、調停人ができる限り公正さを保とうと試みたからであり、そうでなければ、その声望や信頼性は損なわれただろう。そのうえ、もし調停が成功しなかったとしても、公衆の面前にあるので、暴力事件も発生しにくかった。たとえ、暴力的な衝突が発生したとしても、公衆によって容易に制止された。「もめごと解決の茶を飲む」という活動は、官側権力に対する人々の不信任を明らかに表していて、人々は自己の運命を自分の手で掌握することを望んでいる。この活動は、実際において官側の司法の権威を無視しており、当然、政府の支持を獲得することはできなかった。

②実際、この活動が引き起こす問題が甚だしく誇張され、社会を安定化させる役割が覆い隠されて表に出てこない。しかし、どうして資料には「もめ事解決の茶を飲む」ことが調停を成功させた記録が少ないのか？そして、むしろ檔案と地方新聞からは「もめ事解決の茶を飲む」ことが深刻な紛糾、はなはだしくは暴力を引き起こすことがいつも見つかるのか？論理に合う解釈は、茶館でもめ事をうまく解決するのが一つの常態であり、それがニュースにはならない、ということである。したがって、地方の報道から我々が見出すものはすべて、この活動が引き起こした事件である。媒体の「もめ事解決の茶を飲む」に関する報道は、読者に間違っただ誘導を与え、大多数のこれらの活動は失敗したとするものになったのかもしれない。事実においては、大多数の失敗した調停においても、暴力行為を引き起こすことなく、通常は改めて時間を設定し直し、さらにお茶をしている。私たちは、次のように想像できる。もし、一つの自発的な社会的調停が問題を解決できないばかりではなく、むしろさらに多くの面倒を作り出すのであれば、どうしていつまでも衰えないでいられようか。